

## 育児における父親の役割に関する研究 — 障害をもつ子どもの父親の育児意識（その3） —

恒次 欽也\*1

### 要約：

本研究は、一昨年、昨年の研究を踏まえて昨年度実施したアンケート調査に基づいて父親、母親、障害児それぞれの心身状態がどのように影響しあっているのか、いないのかを多変量解析の一種である重回帰分析を用いて分析検討した。その結果、対象者の相互の心身の状態は密接に結びついているものと思われる結果を得た。その結果に基づき、障害児をもつ家庭への援助方法を考察した。今後は障害種別、障害の程度による相違の有無などを調査項目の再検討を含めて実施することが課題として残された。

見出し語：障害児の父子関係 障害児の心身状態 重回帰分析

### 1. 問題及び目的

障害児をもつ家庭は、その子どもの障害の程度により若干の相違はあるものの、主に母親が密着した状態で教育・療育に関わっていく必要がある（恒次、1991）。この母親たちは障害児の養育等を通じて、さまざまな心理的・社会的、ときには身体的な悩みや不安を抱えている

と考えられる。従って、その役割を担う上で種々の問題に直面しやすいといえる。

こうした不安定な母親を精神的・身体的に支援し、時には家庭での養育者となる父親の存在はかなり重要な位置を占めていると考えられる。

瀬谷ら（1986）によれば、障害児の母親の育児意識の根底には父親のあり方が深く関連しており、母親の育児行動を規定していると推測さ

\*1愛知教育大学

れたという。また、障害児の父親像の研究(1988)で母親の様子を外から見守るという父親像が浮かんできたとされる。そこで、昨年度は父親自身の父親像と母親(妻)がみた父親像がどの程度の一致をみるものかの検討を行い、一定の知見を得ることができた。

今年度の研究の目的は、両親のそれぞれの現在の心身状態の自己評価と他者評価、子どもの心身状態の評価、両親が各々、子どものことで相談できる人数、両親、子どもの年齢に基づいて、各自の心身状態(従属変数)に影響を与える要因(説明変数)は何かについて検討することである。

## 2. 方法

調査の方法並びに対象者等は前報告と同じであるが下記にその概略を述べる。

### 2.1 調査対象

調査対象者は、N市立M養護学校に通う小学部36名、中学部27名、高等部54名の生徒の両親125組250名と、A県立N盲学校に通学する小学部29名、中学部14名、高等部23名、その他8名の両親66組132名の合計191組382名である(配付数の約90%になる)。父親の平均年齢43.8歳(SD6.4歳)、母親は41.1歳(SD5.1歳)で、対象児は14.3歳(SD6.6歳)であった。生徒児童の内訳は、男子112名、女子69名、不明10名で、障害種別では、精神薄弱児(染色体異常含む)34名、自閉症37名、てんかんなど54名、視覚障害53名、盲精薄13名

であった。予め学校種別による差をカイ自乗検定により各質問項目について行ったところ有意差はほとんど認められなかったので、両校とも一緒に検討することにした。

### 2.2 質問項目の作成

第二報で報告したとおりであるが、その概略はつぎの通りである。

- ①父親と子どもとの具体的な接触行動の程度(朝夕食、お風呂、外出等)。
- ②父親の育児観や父親観。
- ③父親自身の現在の精神状態、相談相手。
- ④子どもの現在の状態。
- ⑤妻の養育態度や育児、
- ⑥妻の心身状態、などである。

なお、母親への質問は、母親自身と共に母親からみた父親(夫)の子育て、心身状態等についてである。

### 2.3 手続き

質問紙はクラス担任に配布を依頼し、子どもの父母に回答を求めて、約一週間後に回収した。なお、質問紙は、父親用、母親用それぞれ別々の封筒に入れたものを配布し、回収の際には再度各封筒に入れ、緘封の上提出してもらった。また、封筒の表には両親が互いに相談したり、見せたり、代筆したりすることのないように留意事項を記載した。

### 2.4 結果の整理方法

上記目的達成のために、項目間の単相関行列では把握しがたいので今回は重回帰分析を行った。対象とした質問領域は、

- 1) 父親と子どもの接触程度(自己評価)7項目、

- 2) 母親からみた父親と子どもの接触程度  
(他者評価) 7項目,
- 3) 父親自身の心身状態11項目,
- 4) 妻からみた夫の心身の状態11項目,
- 5) 夫がみた妻の心身状態5項目,
- 6) 母親自身の心身状態5項目,
- 7) 父親からみた子どもの心身の状態12項目,
- 8) 母親からみた子どもの心身の状態12項目,

である。

各領域は得点化し、領域毎に合計点を算出する。それと、

- 9) 父親の相談相手の人数,
- 10) 母親の相談相手の人数,
- 11) 父親の年齢,
- 12) 母親の年齢,
- 13) 子どもの年齢,

以上の8領域と5項目、計13変数を分析対象とした。方法は変数増減法である。その際、上記の3)から8)までの6領域から1領域づつを従属変数に指定して、残りを説明変数として分析した。たとえば、3)を従属変数とした場合には(この領域に対応する4)は加えずに、残りの11項目を説明変数とする。

### 3. 結果

得られた資料の中から主要な結果を報告する(表を参照)。表内の説明変数は変数増減法により最終的に意味のある項目だけを記載した。

#### 1) 父親の心身状態

父親の心身状態は、父親がみた子どもの心身

状態、夫からみた妻の心身状態、父親の相談相手の人数、父親の年齢の4項目により説明できる。つまり、父親の心身状態の悪さは子どもと妻の状態が悪いこと、相談相手が少ないこと、自身の年齢が高いことに関わっているといえる。つまり、こうした条件が揃うほど、父親の状態は悪くなるといえる。

#### 2) 妻からみた夫の心身状態

妻からみた夫の心身の状態の悪さは子どもや母親自身の状態の悪さと関連している。つまり1)の結果を妻のサイドから裏付けたものと考えられる。

#### 3) 母親自身の心身状態

母親自身の状態の悪さは夫の状態の悪さ、子どもの状態の悪さの認識と密接に関連している。母親の心身の不調は子どもや夫の不調がそれを増幅することを示唆している。

#### 4) 夫からみた妻の心身状態

この領域は父親自身と母親からみた子どもの心身状態と関連している。父親の心身の不調と母親が子どもの状態を悪いと認識していることが夫からみた時に妻の不調を感じるものになっていると考えられよう。

#### 5) 父親がみた子どもの心身の状態

父親の子どもの心身状態に対する認識は両親それぞれの心身状態の自己認知と結びついている。つまり、両親の状態が悪いことは子どものそれにも何等かの影響を及ぼしていることが推測される。言い換えると、両親がともに良い状態にあることが障害児にとっても必要なことといえる。

#### 6) 母親がみた子どもの心身の状態

母親にとっては、子どもの状態を左右するのは夫や自らの心身状態、それと父親の子どもとの接触の程度にかかわっているといえる。すなわち、子どもの状態の悪さは両親の悪さと接触程度の乏しさと関連していることになる。

#### 4. 考察と今後の課題

今回の分析により、両親、子どもの心身の状態を規定するのはそれぞれ、あるいは自己の状態の良さ、または悪さに依るものであることが推測された。つまり、子どもの状態が悪ければそれは両親のおかれている立場や状況、不安や恐れ、迷い等の問題を反映しているといえるし、他方では両親側の状態の悪さもまた、子どもの抱えているさまざまな問題の反映として考えることができる。このことは子ども自身に限らず、一旦うまくことが運ばなくなったり、破綻をきたしたりすると家族全員が不安定になり、共倒れをしていくような危険があることを示唆しているといえるだろう。

また、今回とくに注目されるのは、1)で述べた父親自身の心身状態に相談相手の人数もまた一つの要因となっているということである。これは、父親もまた、おそらくは母親と同様に障害を有する子どもについてのさまざまな迷いや不安があり、そのことは、それを相談できる人物あるいは相談機関の有無に影響されているのであって、従って、何等かの相談機関なり、父親をサポートするシステムの必要性を示したものと考える。通常、父親は母親を心身両面にわたって、支援し、援助する、瀬谷の言葉を借

りれば外から見守る存在であると自らがそうした役割を規定しているものと考えられる。父親がその役割にとどまっていられるうちは、あまり問題化することはない。しかし、こうした役割を担うことができず、母親共々まきこまれてしまった場合には（母子は当然のこととして）父親を支援する人物や機関の必要性が生じてくるのではないかと思う。

以上の結果を踏まえて若干の問題提起をした。

第1に、障害児を持つ両親に対しては格別の外部からの支援体制が望まれる。そして、その支援には、障害児を一時的に保護・養育することができるような施設を設立することが望まれる。他方では、既存の施設をそうした目的の為に利用していく体制の整備を考慮してもよからう。

第2に、企業・官公庁等には、障害児家庭に対する優遇措置、たとえば、特別休暇・就労時間短縮（早退・遅勤・時間休）などの労働条件の見直し、障害者雇用のよりいっそうの促進を求めていくことが含まれてくるものと思われる。

現在、着実に高齢化社会は進行している。この高齢化は障害児の両親にとっても、本人にとっても例外ではない。当然、両親の子どもへの支援もまた、長期化せざるを得ない。従って、このことを配慮した施策が今後大いに望まれる。

また、障害児の父親研究としては、今回不十分にとどまった質問項目の信頼性と妥当性を検討する必要がある。さらに、この検討に基づいて説明変数を加除するとともに、従属変数を構成する項目を見直した上でのより詳細な分析を

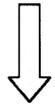
加えていかななくてはならない。

参考文献：

- 1) 川井尚ほか1990 育児における父親の役割に関する研究 厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究」(班長 平山宗宏)」平成元年度報告書 Pp.107-116
- 2) 瀬谷美子ほか 1986 障害小児をもつ母親の育児意識 厚生省母子関係研究班報告書
- 3) 瀬谷美子ほか 1988 障害児の父親像(その1) 第35回日本小児保健学会講演集 Pp.664-665
- 4) 総務庁青少年対策本部 1987 日本の父親と子ども—アメリカ・西ドイツとの比較—「子どもと父親に関する国際比較」報告 大蔵省 印刷局
- 5) 恒次欽也ほか 1991 育児における父親の役割に関する研究—障害を持つ子どもの父親の育児意識(その2)—平成2年度厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究」(班長 平山宗宏) 厚生省
- 6) 山本勝也ほか 1988 障害児の父親像(その2)—父親の生き方とその心情—第35回日本小児保健学会講演集 Pp.666-6

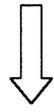
各領域の重回帰分析

| 従属変数名                         | 説明変数名          | 標準化回帰係数  | 回帰係数     | 偏相関係数   |
|-------------------------------|----------------|----------|----------|---------|
| 親自身の心身状態<br>決定係数：0.75764      | 父親がみた子どもの心身状態  | 0.35799  | 0.30170  | 0.4488  |
|                               | 夫からみた妻の心身状態    | 0.55074  | 1.30055  | 0.6144  |
|                               | 父親の相談相手の人数     | 0.12426  | 0.29920  | 0.2414  |
|                               | 父親の年齢          | -0.11942 | -0.08654 | -0.2336 |
| からみた夫の心身状態<br>決定係数：0.77474    | 母親からみた子どもの心身状態 | 0.44819  | 0.38638  | 0.4820  |
|                               | 母親自身の心身状態      | 0.32786  | 0.68005  | 0.3431  |
| 親自身の心身状態<br>決定係数：0.72452      | 妻からみた夫の心身状態    | 0.48077  | 0.23114  | 0.4570  |
|                               | 母親からみた子どもの心身状態 | 0.40932  | 0.16854  | 0.4008  |
| からみた妻の心身状態<br>決定係数：0.70706    | 父親自身の心身状態      | 0.67250  | 0.28371  | 0.6240  |
|                               | 母親からみた子どもの心身状態 | 0.22271  | 0.07535  | 0.2607  |
| 親からみた子どもの心身状態<br>決定係数：0.73755 | 父親自身の心身状態      | 0.35322  | 0.43974  | 0.3664  |
|                               | 母親自身の心身状態      | 0.33262  | 0.79726  | 0.3365  |
| 親からみた子どもの心身状態<br>決定係数：0.74940 | 妻からみた夫の心身状態    | 0.53134  | 0.60351  | 0.5185  |
|                               | 母親自身の心身状態      | 0.36375  | 0.83386  | 0.3809  |
|                               | 父親の子どもとの接触の程度  | 0.14484  | 0.19432  | 0.2732  |



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 要約:

本研究は、一昨年、昨年の研究を踏まえて昨年度実施したアンケート調査に基づいて父親・母親・障害児それぞれの心身状態がどのように影響しあっているのか、いないのかを多変量解析の一方法である重回帰分析を用いて分析検討した。その結果、対象者の相互の心身の状態は密接に結びついているものと思われる結果を得た。その結果に基づき、障害児をもつ家庭への援助方法を考察した。今後は障害種別、障害の程度による相違の有無などを調査項目の再検討を含めて実施することが課題として残された。